

令和6年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

高校生としてふさわしい「知・徳・体」のバランスの取れた人格形成に努めながら、より一層の学力向上に取り組み、生徒一人ひとりの進路希望の実現につながる教育をめざす。

1. 生徒が安心して成長できる安全な社会（学校・家庭・地域）の実現

2. 心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上

2 中期的目標

令和3年に80周年を迎えた本校のこれまでの伝統を継承し、府立高校としての発展と、「知・徳・体」のバランスの取れた人格形成に努めながら、より一層の学力向上に取り組み、生徒一人ひとりの進路希望の実現につながる教育をめざす。

1 生徒が安心して成長できる安全な社会（学校・家庭・地域）の実現

（1） 互いの人権を尊重し、いじめを許さない組織的取り組み

ア 違いを認め合う心を養い、いじめを絶対に許さない学校の雰囲気づくりに組織的に取り組む。また、SNSによる嫌がらせ行為などに対して毅然と指導する。

（2） 自律的に行動する生徒の育成と規範意識の向上

ア 防災・減災教育を推進し、非常変災の際に自らが取るべき態度と行動を身につける。

イ 安全教育を推進し、交通マナー・事故防止・自己防衛などの意識向上に取り組む。

ウ 校則を遵守し、登校時間や学校生活におけるさまざまな活動時間の厳守に取り組む。

※学校教育自己診断において①「本校の学校生活で基本的な生活習慣を身につけられる」R8に（生徒）の指数 85%以上、②「遅刻指導など、基本的な生活習慣が身に付けられるような指導がされている」（保護者）の指数 90%以上を維持する。（R3 ①80% ②87% R4 ①85% ②85% R5 ①89.7% ②93.7%）

（3） 生徒会・各種委員会・部活動等のさらなる発展

ア 学校行事や各種委員会活動等に主体的に参加し、地域との連携を通じて伝統や文化を尊重する態度、創造性を涵養する。

※ 学校教育自己診断「学校は生徒会を中心に、部活動や学校行事を活性化するように工夫している」（生徒）の指数をR8には85%以上とする。（R3 71.0%、R4 73% R5 80.4%）

2 心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上

（1）「わかる授業、充実した授業」に向けた、学校全体の教育力向上

ア 教職員一人ひとりが授業実践についての研究・改善を進めるとともに授業公開を行い、その目的達成のきっかけとする。

イ 自学自習の推進とともに課題を発見し探究する意欲をもつ主体的な学習者を育てる。

※ 授業アンケート「先生は生徒の意見や要望を取り入れ、授業改善に生かしている。」の回答をR8には3.4以上とする。（R3 ー、 R4 3.21 R5 3.29）

（2）進路意識の高揚と進路希望の実現

ア 補習授業・個別指導・自習環境の整備など、進路希望実現への支援の充実をはかる。

イ 生徒が自分にふさわしい進路目標を設定できるよう、キャリア教育を推進し、様々な援助・支援を行う。

ウ 高大連携を進めるとともに、大学入試等に関する最新情報を全教職員が正しく理解し、生徒の希望や適性等に応じた適切なガイダンス及び個別面談を行う。

※ 関関同立及び国公立大学の延べ合格者数が100人以上となるよう継続して指導を行う。（R3 124人、R4 85人 R5 95人）

（3）国際交流活動の推進

ア オーストラリアの姉妹校ベイビュー・カレッジとの国際交流をはじめとする各種事業の充実をはかり、国際理解を深める。

※ 英検等外部資格試験の受験を推奨。（のべ受験者R3 ー、R4 371人 R5 315人）

（4）健康への関心と自己管理能力の向上による生きる力の育成

ア 学校行事・部活動充実のための環境づくりを図る。

イ 支援を必要とする生徒について、保護者・担任との連携を図りながら個別の支援を考えていく。

※ 学校教育自己診断「学校の先生は生徒の心身の様々な悩みを聞き、適切に答えてくれる」（生徒）の肯定的回答をR8には80%にする。（R3 69.5%、R4 77%、R5 78.0%）

（5）専門科の取り組み

【英語科の教育活動の充実】

ア 英語の運用能力の向上により、コミュニケーション能力を育成するとともに、多角的に異文化理解・国際問題・時事問題などを扱うことで幅広い知識・考える力・柔軟な国際感覚・多面的な視野を身につけさせる。

※ 資格試験取得を促し、R8には卒業時におけるCEFR B1（英検2級など）レベル以上の取得者を55%、CEFR B2（英検準1級など）レベル以上の取得者を7%にする。[R5 CEFR B1以上取得者 49.3%、B2以上 5.4%]

【理数科の教育活動の充実】

ア 理数科目に関する知識を身に付け、技術として実験・発表に扱うことのできる生徒を育成する。

※ R8に学校教育自己診断「理数科の教育活動を通して、科学的な知識・技術が身についた」（理数科生徒）の指数85%を維持する。（R4 ー、R5 85.5%）

（6）リーディングGIGAハイスクール指定校としての取り組み

ア 情報の授業や探Q（総合的な探究の時間）を中心に生徒1人1台端末の積極的な利活用をめざす。

イ 出席停止生徒や臨時休業の際にオンラインを活用した学びの保障を100%実施する。

ウ 学校行事や部活動での生徒1人1台端末の有効的な利活用をめざす。

※学校教育自己診断「学校は1人1台端末を効果的に活用している。」（生徒）の肯定的回答をR8には指数90%以上にする。[R5 81.6%]

3 チーム「いちりつ」として課題解決にあたる教員集団の確立

（1）学校の教育課題に対し全員で取り組む環境づくり

ア 学校の課題に適した教員チームを中心として、主体的な教員集団を確立する。

（2）働き方改革としての業務の平準化、効率化

ア 時間外勤務時間の縮減を図るため、教職員への啓発と意識改革を図るとともに部活動方針の遵守に努める。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析〔令和6年12月実施分〕	学校運営協議会からの意見
----------------------------	--------------

府立いちりつ高等学校

【全般を通じて】 ・生徒 24 項目中肯定率について 11 項目が昨年度より 2 ポイント以上上昇し、2 項目で 2 ポイント以上下降した。保護者 24 項目中肯定率について 4 項目で昨年度より 2 ポイント以上上昇し、5 項目で 2 ポイント以上下降した。教職員 30 項目中肯定率について 9 項目で昨年度より 2 ポイント以上上昇し、9 項目で 2 ポイント以上下降した。 ・昨年度と比較して生徒の肯定率が全体的に上昇し、保護者と教職員の肯定率は横ばいであることが伺える。 【学習指導等】 ・教員の「学習指導の方法や内容」についての肯定率は 97％と昨年度より上昇しており、生徒の「授業」についての肯定率も 85％で微増している。保護者については昨年度より下降しており、生徒・教員との乖離がみられるため、今後工夫や改善が必要である。 ・「家庭学習」に関する肯定率が生徒・保護者とも 50％後半から 60％台にとどまっており、工夫や対策が必要である。 【生徒会行事・部活動】 ・学校行事は生徒が中心となって取り組み、活発だと答えた肯定率は保護者が 94.5％、生徒が 87.4％と高い数字を維持している。 ・部活動は活発だと答えた生徒が 92.9％、保護者が 86.9％と肯定率がいずれも上昇した。 【生徒指導等】 ・学校の先生は生徒の話を良く聞いてくれると答えた生徒が 89.1％、保護者が 84.1％であることから学校への信頼が伺える。 ・生徒指導の方針への納得度は、生徒が 5.4 ポイント、保護者が 3.3 ポイント上昇した。生徒の意見を取り入れた指導が反映されたと考えられる。 ・生徒、保護者とも基本的な生活習慣が身につくとの回答が 90％を超えている。 【その他】 ・進路指導について、生徒・保護者・教員とも 80～90％台の肯定率であり、今後もきめ細かい進路指導を継続する。 ・学校は ICT や 1 人 1 台端末を効果的に活用していると答えた生徒の肯定率は 84.5％と昨年度より上昇しており、リーディング GIGA ハイスクール指定校としての取組みが反映されている。 ・校舎等の施設設備についての肯定率が生徒 65％、保護者 42％、教員 39％と昨年度より下降しており、いずれも他の項目と比較して極めて低いことから、長期的な対応が求められる。	【第 1 回】 令和 6 年 7 月 11 日実施 ・学校の PR として生徒が発信に関わると効果があるだろう。 ・ICT の活用やズレ勤の実施により職員の働き方改革を進めているのはよい。 ・これまでから継続している地域連携の充実を今後も望んでいる。 【第 2 回】 令和 6 年 11 月 28 日実施 ・英語の教材ソフトの活用は生徒の自学自習、個別最適化という点でよい取組みである。ぜひ進めてもらいたい。 ・生徒が SNS を活用して情報発信するのは視覚に訴えるので、中学生への広報として効果的であろう。 ・部活動の活性化と働き方改革を両立させる案として、来年度から校時を変更して、放課後を現状より 10 分長くするのはよい方策である。 【第 3 回】 令和 7 年 2 月 26 日実施 ・リーディング GIGA ハイスクール指定校としての取組みは、中学校段階から ICT を活用している生徒が今後一層入学してくることから、高校においてもさらに充実させてほしい。 ・遅刻指導についての指導は厳しさも必要だが、学区の広がりや、生徒の多様化なども考慮してもらいたい。生徒ひとり一人の実情に合わせた柔軟な対応で、楽しい学校生活を送れるよう、支援を視野に入れた指導が今後必要となってくるのではないか。 ・地域交流に学校だけでなく幼稚園や保育所が入っているのは好ましい。次年度以降も地域連携を充実、継続させてほしい。 ・教員の働き方改革は必要だが、一方で部活動などの指導も生徒の育成において必要であり、重要な部分だと考える。勉強だけでなく部活動や学校行事などすべてに取り組む学校としての特色は大切にしてほしい。 ・施設設備面は学校だけでは解決しない課題であり、設置者へ対応してもらおうよう働きかけてほしい。 ※学校経営計画について令和 6 年度評価、令和 7 年度計画について承認。
--	--

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R 5 年度値]	自己評価
1 生徒が安心して成長できる安全な社会（学校・家庭・地域）の実現	（１）互いの人権を尊重し、いじめを許さない組織的取り組み	ア 様々な人権問題について正しい知識を身につけ、各種行事・LHR 等を通じてお互いの人権を尊重し、協力する態度・意識を育てる。生徒・保護者・教職員対象の講演会・研修等取組を進める。 イ いじめ未然防止の推進のため、各学年に対しスマホ・SNS に関する講話および人権講話を開催する。また、掲示物で常日頃から注意喚起をおこなう。	ア・生徒・保護者・教職員対象の各種取組を進め、講演会等を年 1 回以上合計 6 回以上実施する。[6 回] イ スマホ・SNS に関する講話および人権講話を開催する。各学年 1 回開催する。[3 回]	ア 生徒向け人権講演会を 1 年 10 月、2 年 2 月、3 年 12 月に、保護者・生徒・教職員対象研修を 7 月に、教職員研修を 6 月、12 月、合計 6 回実施した。今後も様々な人権問題を扱い、人権尊重の態度や意識を醸成するため、評価指標を変えて取組みを進める。(○) イ スマホ・SNS に関する講話および人権講話 4 月、6 月、12 月に実施した。今後も指導を継続する。(○)
	（２）自律的に行動する生徒の育成と規範意識の向上	ア 防災・減災教育を推進し、非常変災時には自らが支援者として主体的に行動し、社会に貢献する態度を育成する。 イ 安全教育を推進し、交通マナー・事故防止・歩行者という立場も含めた自己防衛および安全配慮などの意識向上に努める。 ウ けじめのある有意義な学校生活を送れるよう、様々な活動時間を厳守する意識を高めるため、学年・分掌が連携、生徒状況を把握し、個に応じた適切な指導を行う。また遅刻傾向の分析や対策を全職員で共有し、遅刻防止の啓発活動をおこなう。 エ あいさつ・服装・頭髮・スマートフォン等の指導により、校則の遵守と規範意識の向上に取り組む。また、講話等を通じて、校則や規律を守ることの大切さを理解させる。	ア 総合避難訓練を年に 2 回以上実施する。[2 回] イ 交通安全講話または自転車通学者向けの講話等を年 1 回実施する。[1 回] ウ・遅刻者を 1 日平均 5 人以下とする。[4. 9 人] ・学期ごとに遅刻防止週間を設定し、指導委員の主体性を生かした遅刻防止の啓発活動を実施。[3 回] エ・学校教育自己診断「本校の学校生活で基本的な生活習慣を身につけられる」(生徒) の指数 85 以上を維持する。[89. 7%] ・学校教育自己診断「遅刻指導など、基本的な生活習慣が身に付けられるような指導がされている」(保護者) の指数 90%以上を維持する。[93. 7%]	ア 南海トラフ地震を想定した訓練を 7 月に、火災を想定した訓練を 12 月に実施した。今後も指導を継続して行う。(○) イ 自転車通学者向け講話と交通安全講話をそれぞれ 4 月に実施。今後も更なる安全指導に努める。(○) ウ・遅刻者は 1 日 5. 65 人であり、目標を達成できなかった。今後指導対象や指導方法を再検討して目標設定する。(△) ・学期ごとに遅刻防止週間を設定、指導委員が遅刻防止の啓発活動を実施した。(○) エ・学校教育自己診断「本校の学校生活で基本的な生活習慣を身につけられる」(生徒) の指数 90. 1％となり達成、今後も維持する。(○) ・学校教育自己診断「遅刻指導など、基本的な生活習慣が身に付けられるような指導がされている」(保護者) の指数 93. 2％となり達成、今後も維持する。(○)

府立いちりつ高等学校

	(3) 生徒会・各種委員会・部活動等のさらなる発展	ア 学校行事や各種委員会活動を通じて、自分で考え行動を起こすことができる生徒集団を育成する。 イ 部活動等の集団活動を通じて、規範意識や他者と協力することの大切さを理解させるとともに、他者との違いを理解・尊重できる生徒を育てる。 ウ 地域との連携の機会を生かし、社会参画への意識を高める。	ア 学校教育自己診断「学校は生徒会を中心に、部活動や学校行事を活性化するように工夫している」(生徒)の指数 78%以上を維持する。 [78.8%] イ 学校教育自己診断において「本校の部活動は活発だ。」の指数 90%以上を維持する。 [90.5%] ウ 小学校や幼稚園等との連携を年に3回以上行う。[新規]	ア 学校教育自己診断「学校は生徒会を中心に、部活動や学校行事を活性化するように工夫している」(生徒)の指数 85.9%となり達成。各行事において生徒会役員が企画提案し、各委員が運営するなど自主的な活動が見られた。今後は目標を上方修正し、充実を図る。(◎) イ 入部者も増加し、学校教育自己診断「本校の部活動は活発だ。」の指数 92.9%となり達成。今後も維持する。(○) ウ 小学校や幼稚園等との連携は行事に加え授業でも実施し、回数は合計8回と目標を上回った。今後も目標を上方修正し交流する。(◎)
2 心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓くための学力・体力の向上	(1)「わかる授業、充実した授業」に向けた、学校全体の教育力向上	ア 個々の生徒の進路希望実現のために必要な教育課程の編成、改善に努める。生徒が選択科目を適切に選択できるよう支援するとともに、個々の学習発達段階に応じた授業・補習の実施をはかる。 イ 主体的・対話的で深い学びを促すとともに、探究する意欲や理解力を深めるよう授業力の向上をめざし、生徒の自ら学ぶ力を育成する。	ア 補習講座時間数 200 時間以上を確保する。[R5 夏季補習 80 分 107 回、定期考査に向けての補習、論文指導、英検対策指導等 合計 200 時間以上] イ 授業アンケート①「先生は教科書の他、役に立つプリントなどをうまく使っている。先生が与える教材や課題の量は自分にとって適切である。」と②「授業を受けて知識や技能が身に付いたと感じている。」の指数の①維持と②上昇。[①3.43 ②3.32]	ア 夏季補習 80 分 131 回、定期考査に向けての補習、論文指導、英検対策指導等 合計 200 時間以上実施した。今後も取組みを継続する。(○) イ 授業アンケート①「先生は教科書の他、役に立つプリントなどをうまく使っている。先生が与える教材や課題の量は自分にとって適切である。」の指数 3.45 ②「授業を受けて知識や技能が身に付いたと感じている。」の指数 3.35 となり目標を達成。今後も指数の維持に努める。(○)
	(2) 進路意識の高揚と進路希望の実現	ア 自習室を開設することにより生徒の学習機会の支援を行う。 イ 生徒自らが自己の興味・関心や進学希望に応じた学習課題を選択できるよう、適切なプログラムを設定し、生徒各自の主体的な学習活動をうながす。 ウ 高大連携を推進するとともに、大学入試等に関する最新情報を全教職員が正しく理解し、生徒の希望や適性等に応じた適切なガイダンス及び個別面談を行う。	ア 自習学習時間を年間 250 時間以上確保する。[R5 260 時間] イ 学校教育自己診断において「自分の希望する講座が開講されている」の指数 80%以上を維持する。 [84.3 %] ウ 学校教育自己診断において「学校には、生徒の必要としている進路情報があり、積極的に活用できる様になっている」の指数 80%以上を維持する。[86.5%]	ア 夏季休業中の自習室 176 時間、2 学期より早朝自習室を毎朝 1 時間通算 120 時間、合計 296 時間開設。今後も取組みを継続して行う。(○) イ 学校教育自己診断「自分の希望する講座が開講されている」の指数 84.9%となり達成。今後も維持を図る。(○) ウ 学校教育自己診断「学校には、生徒の必要としている進路情報があり、積極的に活用できる様になっている」の指数 91.2%以上となり達成。今後は目標を上方修正し充実を図る。(◎)
	(3) 国際交流活動の推進	ア 英検等外部資格試験の受験者を増やし、国際社会で通用する英語力をつけさせる。 イ オーストラリアの姉妹校ベイビュー・カレッジとの交流を継続的に行う。	ア 英語資格試験の年間受験者数を 300 名以上とする。[315 名] イ 姉妹校との国際交流を年 1 回以上実施する。[2 回]	ア 英語資格試験の受験者数 345 名であり目標を達成した。今後も維持する。(○) イ 姉妹校訪問団を受け入れ交流事業を行った。(9/16～9/22)。今後も交流を継続する。(○)その他にインドネシア教育大との交流プログラムを行った(11 月)。
	(4) 健康への関心と自己管理能力の向上による生きる力の育成	ア 自らの健康に関心を持ち、自己管理能力を高め、生きる力を身につける。健康的な生活習慣を身につけるとともに、生涯を通じて自らの健康を心身ともに適切に管理し、改善していく資質や能力を育成する。 イ 精神面の不安や悩みを抱える生徒を把握し、保護者・学年・スクールカウンセラーとの連携を取りながら適切に対応する。 ウ 支援を必要とする生徒の実態を把握し、保護者・担任との連携を図りながら個別の支援を考えていく。	ア 学校教育自己診断において「学校の先生は、生徒の心身の様々な悩みを聞き、適切に答えてくれる」の指数 78%以上を維持する。[78.0%] イ 学校教育自己診断において「生徒の健康や安全に関する指導が適切に行われている。」(保護者)の指数 80%以上を維持する。[87.9%] ウ 支援委員会を年 6 回以上開催する。[7 回]	ア 学校教育自己診断「学校の先生は、生徒の心身の様々な悩みを聞き、適切に答えてくれる」の指数 83.8%となり達成。目標を上方修正し、今後も健康的な生活習慣の習得や健康管理、改善を実践できるよう働きかける。(◎) イ 学校教育自己診断において「生徒の健康や安全に関する指導が適切に行われている。」(保護者)の指数 86.1%となり達成。今後も保護者・学年・スクールカウンセラーと連携し取組みを維持する。(○) ウ 支援委員会を年 9 回開催した。今後も支援の必要な生徒への支援プログラムを継続して行う。(○)
	(5) 専門科の取組み	【理数科】 ア 自然現象を科学的な視点でとらえ、科学的な知識・実験技術を身につけるけるために、1 年生の理数実習(野外観察実習も含む)にて実験・体験学習を行う。 イ 理数実習により、情報をまとめ、表現力を	【理数科】 ア・イ・ウ 学校教育自己診断「理数科の教育活動を通して、科学的な知識・技術が身についた」(理数科生徒)の指数 80%以上を維持する。[85.5%]	【理数科】 ア・イ・ウ 野外観察実習や理数実習での取組も計画通りに実施できた。学校教育自己診断「理数科の教育活動を通して、科学的な知識・技術が身についた」(理数科生徒)の指数 92.3%となり、目標を

府立いちりつ高等学校

		鍛えるために、各実習後のまとめの発表を2回以上行う。 ウ 課題研究（理数探究）により、得た知識からの応用力を養い、情報をまとめ表現力を鍛えるために研究成果の校内での発表を行う。 エ 科学的な知識の充実をはかるため、大学との連携による講演会および施設見学をそれぞれ実施する。 【英語科】 ア 総合的な英語の運用能力の育成をめざし、資格試験取得を促す。 イ 高大連携等により、外部講師を活用し、英語の運用能力の向上により、コミュニケーション能力を育成するとともに、多角的に異文化理解・国際問題・時事問題などを扱うことで幅広い知識・考える力・柔軟な国際感覚・多面的な視野を身につけさせる。	エ 1年生と2年生において、講演会や施設見学を実施する。[2回] 【英語科】 ア 資格試験取得を促し、卒業時にはCEFR B1（英検2級など）レベル以上の取得者を50%、CEFR B2（英検準1級など）レベル以上の取得者を6%にする。[R5 CEFR B1以上取得者 49.3%、B2以上 5.4%] イ 外部講師を招聘し、英語科の生徒対象の講演会を2回以上実施する。[2回]	上回った。今後は目標を上方修正し、活動の充実を図る。(◎) エ 大学教授による講演会2回、大学施設見学を1回実施した。(○) 【英語科】 ア CEFR B1（英検2級など）レベル以上の取得者は51%、CEFR B2（英検準1級など）レベル以上の取得者は6%となり、目標は達成した。(○) 今後は資格取得については全学的な取組みとし、英語運用力について別途の目標を設定する。 イ 大学教員や招聘し、英語科の生徒対象の講演会を2回実施した。(○)
	(6) リーディングGIGAハイスクール指定校としての取組み	ア 情報の授業や探Q（総合的な探究の時間）を中心に生徒1人1台端末の積極的な利活用をめざす。 イ 出席停止生徒や臨時休業の際にオンラインを活用した学びの保障を100%実施する。 ウ 学校行事や部活動での1人1台端末の有効的な利活用をめざす。	ア・イ・ウ ・学校教育自己診断「学校は1人1台端末を効果的に活用している。」の肯定的回答の指数80%以上を維持する。[81.6%]	ア・イ・ウ 授業やそれ以外の学校行事等においても日常的に1人1台端末を活用し、オンラインによる配信も実施している。学校教育自己診断「学校は1人1台端末を効果的に活用している。」の肯定的回答の指数84.5%となり目標を達成。今後は目標を上方修正し取組みの充実に努める。(◎)
3 チーム「いちりつ」として課題解決にあたる教員集団の確立	(1) 学校の教育課題に対し全員で取り組む環境づくり	ア 学校の課題に適した教員チームを中心として、主体的な教員集団を確立する。	ア 学校教育自己診断「生徒のことについて、適切に相談に応じてくれる」（保護者）の指数80%以上を維持する。[85.6%]	ア 学校教育自己診断「生徒のことについて、適切に相談に応じてくれる」（保護者）の指数84.1%となり達成。今後も教員がチームとなって課題に取り組む。(○)
	(2) 働き方改革としての業務の平準化、効率化	ア 時間外勤務時間の縮減を図るため、教職員への啓発と意識改革を図るとともに部活動方針の遵守に努める。	ア 時間外勤務の実態を把握し、個別の業務負担を減少させ、教職員の平均時間外勤務時間の更なる縮減を図るとともに時間外在校時間月80時間以上の教職員数の減少に努める。 [R5 44.7時間、月80時間以上のべ44人]	ア 教職員の平均時間外勤務時間は42.7時間と減少したが、時間外在校時間月80時間以上の教職員数はのべ67名となり、目標を達成できなかった。次年度以降は校時を見直し、放課後を10分早めることで対策の一助とし、更なる時間外の減少に努める。(△)